

特集

新課程の中学校英語 授業づくりの今とこれから

巻頭エッセイ

表紙裏 Marcher Ensemble 一ともに歩む一 川口 莉穂

特集 新課程の中学校英語 授業づくりの今とこれから

- 01 「主体的・対話的で深い学び」=地に足をつけた英語教育 真倉 美里
- 04 「即興力」「主体的に取り組む姿勢」の育成と「語彙力」の定着 中野 峻佑
- 06 英語で「やり取り」できる生徒を育てたい! —新課程の授業づくりで目指していること 駒澤 正人
- 08 小中接続の視点から見る新たな授業づくりのTips 坂本 南美

連載

- 10 英語教師のための基礎講座 言語活動のキーポイント—ゴール・ルール・ツール・ロール— 今井 裕之
- 11 Essay Friends with Words Mark Schwarz
- 11 リツツで納得! 学校英文法の「文法」 In what sense can you count on it? 亘理 陽一
- 12 明日の授業と評価をブラッシュアップするQ&A 酒井 英樹
- 13 TEN通信 NEW CROWN デジタル教科書 アップデートのお知らせ

Marcher Ensemble

—ともに歩む—

川口 莉穂 Kawaguchi Raho

遠く離れた西アフリカのベナンの地で、私は文化も国籍も異なる
かけがえのない友人たちに出会いました。
「相手に寄り添い、ともに歩む」
私が人生で一番大切にしていることです。

高校2年生のとき、タイに1年間交換留学に行ったことをきっかけに、国際協力・途上国支援に関心を持ち始めました。留学前の私は将来の夢もなく、留学も家族の勧めで決めただけでした。しかし、現地の友人の質素な暮らしぶりや、同世代の女の子たちが客引きをする姿は当時16歳の私にとって衝撃的で、途上国の抱える社会問題に目が向くようになりました。

大学3年生の就職活動時にも、興味関心が「国際協力・途上国支援」からぶれることはなく、就職先にはJICAを希望していました。しかしJICAは不採用になり、他の企業で妥協したくなかった私はその時点で就職活動をやめました。就職という道ではなく違う道で夢を追い続けることを決め、青年海外協力隊に応募したのです。2年間の現場経験を積むことができる青年海外協力隊はとても魅力的でした。派遣先は西アフリカのベナン共和国。青少年活動という職種で、学校保健活動に従事していました。そして、活動先でのシングルマザーとの出会いが現在の仕事のきっかけとなりました。

彼女は仕事がなく、友人から小銭やおか

ずを分けてもらって生活していました。しかし支援していた友人たちの生活も決して豊かではありません。私も彼女に何かしたいと思いましたが、物資などの一時的な支援はしたくありませんでした。そこで思いついたのが、ベナンの人たちが普段から身にまとっている色鮮やかなアフリカ布を使ったものづくりです。彼女は仕立ての学校を卒業したものの、ミシンを買うお金がなく仕事ができませんでした。私はクラウドファンディングで資金調達をしてミシンを購入し、「シェリーココ」というプロジェクトをスタートさせました。現地の他の職人の仕事を奪ってしまわないよう、浴衣を作って日本で販売することにしました。

現在は、浴衣のみならずアパレルやキッチンインテリアなど幅広い商品ラインナップを展開しています。シェリーココは現地の雇用創出のために立ち上がったブランドですが、アフリカで作られているというだけで「かわいそうだから」と購入されるブランドでは長く続きません。彼女たちが自立し持続的に仕事をしていくためには商品力のある製品作りをしなくてはなりません。そのため時間をかけて日本人好みに合う柄を選び、無地



ベナンの布市場



シェリーココの職人たち



株式会社シェリーココ代表。高校時代のタイ交換留学をきっかけに国際協力・途上国支援に関心を持つ。慶應義塾大学卒業後、2014年から2年間、JICA青年海外協力隊として西アフリカのベナン共和国に赴任。2015年に現地雇用創出のため、アフリカ布を使ったものづくりをスタート。現在も現地職人たちの笑顔を見守り続けるため奮闘中。

布と合わせたシャツやネクタイを作るなど、デザインにもこだわっています。

ただ「支援」になるだけでも「かわいい」だけでもない、その両方を兼ね備えたブランドを私たちは目指しています。

学生時代は「途上国問題を解決したい」という大きな目標を持っていましたが、現地で活動をする中で形を変えていくことがモチベーションになっています。

ベナンの人々は、懸命に日々の生活を送っています。経済的に裕福でない人も、困った人がいればすぐ手を差し伸べ、赤の他人でもお金に困っている人がいれば、自分が借金をしてまで用立ててあげます。私はそんな彼らの姿勢が大好きです。

「目の前の友人を救いたい。」ベナンで出会った人たちは、私にとって「赴任先の途上国人」という肩書きを超えた友人でした。そんな友人と寄り添って歩んできたからこそ、ベナンという決して整った環境ではない地においても、長く想いを絶やさずビジネスを開拓できています。彼女たちがいる限り、私はこれからも彼女たちと前を向いて歩んでいきます。



日本での販売の様子

新課程の中学校英語

授業づくりの今とこれから

2021年4月から新しい学習指導要領に対応した中学校の教科書が使われています。

どのような授業をしたらよいのか、教室では試行錯誤が続いています。

本特集では、生徒が「どのように学ぶか」の指針として示された

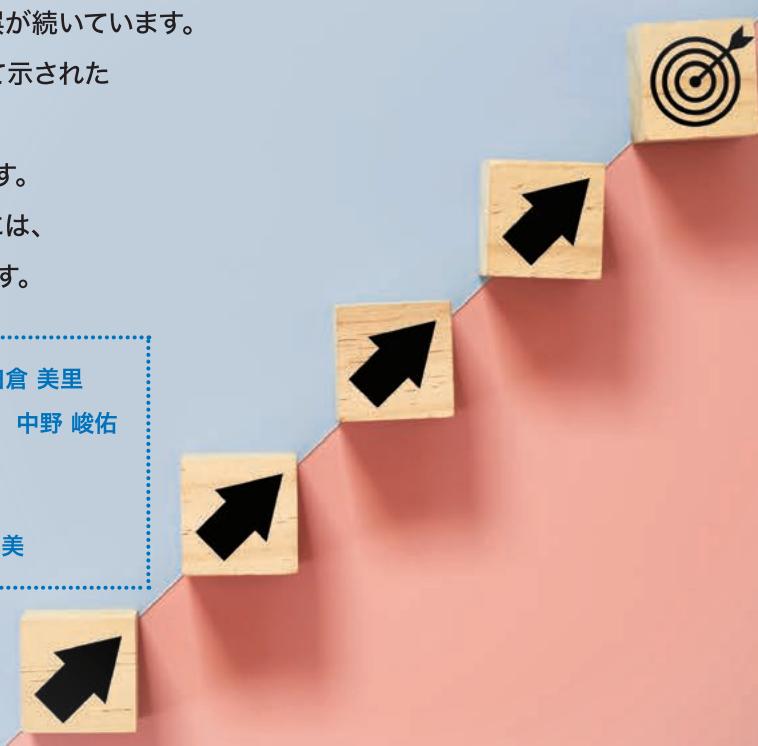
「主体的・対話的で深い学び」の視点から、

臼倉美里先生に授業づくりについて解説いただきます。

また、中野峻佑先生・駒澤正人先生・坂本南美先生には、

新課程の授業づくりの現状と課題を報告いただきます。

- 01 「主体的・対話的で深い学び」=地に足をつけた英語教育 白倉 美里
- 04 「即興力」「主体的に取り組む姿勢」の育成と「語彙力」の定着 中野 峻佑
- 06 英語で「やり取り」できる生徒を育てたい！
—新課程の授業づくりで目指していること 駒澤 正人
- 08 小中接続の視点から見る新たな授業づくりのTips 坂本 南美



「主体的・対話的で深い学び」 || 地に足をつけた英語教育

白倉 美里(東京学芸大学)

今だからこそ、「試行錯誤」の共有を

新学習指導要領では、児童生徒が学校での学びを通して「何ができるようになるか」ということについて、「育成すべき資質・能力の三つの柱（知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等）」として示されている。そして、これらの資質・能力を育成するために生徒が「どのように学ぶか」の指針として示されているのが「主体的・対話的で深い学び」の実現である。中学校で新学習指導要領が施行されて1年となる現在、学校現場で

は試行錯誤が続いている。手探りで必死に取り組んでいる今だからこそ、知恵を出し合うことが求められている。本特集を通して現場での試行錯誤の現状と課題を共有することで、より良い授業づくりを目指す一助となれば幸いである。

本稿では新課程の授業づくりの基本となる「主体的・対話的で深い学び」の英語科での考え方について、改めて整理したい。まず、「主体的・対話的で深い学び」を理解するために、ちょっと言葉遊びをしてみた

いと思う。ある用語の定義がよくわからないとき、「反対の意味はなんだろう」と考えてみると案外理解が進むことがある。

- ・主体的↔受動的
- ・対話的↔一方的
- ・深い↔浅い

これらをつなげてみると、「受動的・一方的で浅い学び」となる。例えばどのような授業になるかを想像してみると、教師が一方的に生徒に話すだけで、教師と生徒、あるいは生徒同士が（英語で）やり取りをする活動がいっさいなく、授業が終わったときに生徒が「今日は結局何を学んだんだっけ?」と思う授業、といったところであろうか。おそらくこれは多くの教師が目指す授業とは対極にあるものではないだろうか。つまり裏を返して表(?)にすると、「主体的・対話的で深い学び」とは、「まっとうな授業」ということになる。

英語科での「主体的・対話的で深い学び」

本稿ではこのようなノリで、常識を生かした言葉遊びを続けていきたい。これは決してふざけた気持ちや、学習指導要領を軽んじているわけではなく、むしろ大真面目である。新しい用語が導入されたとき、それに不必要に惑わされることがないようするためにには、まずは常識を使って考えてみることが大切であるからだ。すると案外「なんだ、当たり前のことじゃないか」と落ち着くことが多い。学習指導要領に記載されている内容は、抽象度が高い用語で表現されてはいるものの、極めて常識的で当然のことなので、受け止める側が過剰に反応してあたふたしてはいけない。教育のプロフェッショナルとして、どっしりと構えて受け止めれば、解釈を間違えることはない。また、生徒の学びを促進する授業を行うためには、生徒にとってもっとも身近な存在である教師が自ら考え、判断して、生徒にとって最善の策を講じなければならない。何が正しいか、どうあるべきかの正解は教室の外にはない。教師としての思考力・判断力を鍛えるにはこうした大真面目な言葉遊びが役に立つ。

2016年12月の中央教育審議会答申(資料1)では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善は、以下の①～③の視点に立って行なうことが示されている。英語の授業における具体を添えて、見てみよう。

「具体」を見ると、英語で行なうのが容易ではなさそうなものがある。むしろ本気でやろうとしたら難しそうるものの方が多いのではないかだろうか。①～③の視点は、全教科共通の指針であり、つまりは母語で学ぶ教科の視点で書かれたものであることから、英語を使って同じことをやろうとすると無理が生じるのは当然である。たとえそれが理想であったとしても、生徒に無理をさせてはいけない。

英語で行なうことが難しいのであれば、そこは母語(日本語)を使えば良いという考え方もある。確かに一理あるが、その場合、年間の英語の総授業時間数のいといったどれほどか、それ(つまり、日本語で深く考へる時間)にあてがわれることになるのか、そしてその結果、生徒が英語に触れたり、練習したり、使ってみる時間は十分に確保されるのだろうか。英語の教科書で学んだ内容について、生徒に深く(日本語で)考へさせる活動には意義があるし、むしろ学校での学びにおいてはそういう時間は不可欠であろう。しかし、英語科としての優先事項と、他教科の学びとのバランスを考える必要がある。**英語科の最優先事項は、生徒の英語力を伸ばすことである。**それだけが英語の授業の目標ではないが、少なくとも二の次にしてはいけない。そのためには、まずは生徒が取り組める活動から始めて、少しずつ段階を踏んで難易度

を上げていくような授業計画が欠かせない。また、授業のゴールを見据えることは大切だが、スタート地点の生徒の実力を確認することを忘れてはいけない。そうしないと、生徒が到底できないようなむしゃをやらせたり、教師がサポートをしそうて「生徒が一人でできた風」を装うばかりになりかねない。

実際、文科省の資料(資料2)でも、高度な社会課題の解決だけを目指したり、そのための討論や対話といった学習活動を行ったりすることのみが「主体的・対話的で深い学び」ではなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題が見られる場合には、それを身に付けさせるために、子供の学びを深めたり主体性を引き出したりといった工夫を重ねながら、その確実な習得を図るべきだと書かれている。

また、「主体的・対話的で深い学び」の実現のために深く考へる機会は、国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭といった他教科の学びの中でも確保されている。**他教科に任せられる部分は信頼して任せることで、英語科では生徒の英語力を伸ばすことにしっかりと力点を置いた授業展開が可能になる。**教科の特質を生かして役割分担をすることで、中学校での学び全体を通してバランスのとれた「主体的・対話的で深い学び」が実現できるのではないだろうか。

■「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の三つの視点と具体

| | | |
|---------|--|---|
| 視点 ① | | 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。 →具体：授業の目標や内容を英語で理解させる。／授業の振り返りを英語で行わせる。 |
| 視点 ② | | 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。 →具体：クラスメイトや教師等と、英語でやり取りさせる。／やり取りを通して新しい発見を促す。 |
| 視点 ③ | | 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考え方を基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。 →具体：新しい知識を既習の知識と関連付けさせる。／学んだ内容を日常生活で応用させる。 |

大切なのは「仕掛け作り」

「主体的・対話的で深い学び」の実現は、アクティブラーニングの視点からの授業改善を目指すことと同義である。その際、「生徒たちの頭の中がアクティブに働いているか?」という視点が大切で、単に発表させたり話し合わせたりすればアクティブラーニングになるというわけではない(資料3)。つまり、「活動あって学びなし」の状態に陥らないように、ものの「見方・考え方」を鍛えるような活動を授業に取り入れることが求められている。では、生徒たちの頭の中の状態を、教師はどこまでコントロールできるのだろうか。常識を使って考えてみると答えは明白で、生徒の思考を他者がコントロールすることはできない。教師にできることは、生徒の学びを促進するため

の「仕掛け作り」のみである。

例えば英語の授業でスピーチをさせるとき、スピーチの目的を明確にし、聞き手を意識して内容を考えさせたり、デリバリーを工夫させたりすることなどが挙げられる。ただし、これを可能にするためには、スピーチに必要な語句や表現を定着させるための活動が不可欠であることも忘れてはいけない。ものの「見方・考え方」を働きながら英語を使うための余裕を生み出すためには、教科書本文の音読練習などの基礎反復を避けては通れないし、これも「仕掛け」の一部である。表面的には「主体的・対話的で深い学び」には見えない活動であっても、それはその先にあるゴールにつながる階段の一つであり、それなくしては

最上階までたどり着けないということを、英語科の教員は特に意識する必要がある。

仕掛け作りの腕を磨くには、場数を踏むしかない。うまくいくという期待を持って、ある活動を生徒にやらせてみて、失敗して、修正して、再度やらせてみて、を繰り返す(いわゆるPDCAサイクル)しか道はない。試行錯誤の過程での失敗は失敗ではなく、教師が自らの指導を振り返ることを忘れなければ、必ず改善へつながる一歩となる。自分が作った仕掛けがうまく機能しているかを、日々の授業での生徒の行動観察や、定期的な教育測定によって常に確認し、仕掛けを微調整していく。こうした積み重ねが、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる。

成果を焦らず、見守る

教師にとって「主体的・対話的で深い学び」の実現は試行錯誤の連続であると述べたが、生徒にとっても同じことが言える。「主体的・対話的で深い学び」は1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、実現には時間がかかる。そのため、単元や題材のまとまりの中で、どのタイミングで生徒自身が自らの学習を振り返る機会を設けるか(主体的な学び)、ペアやグループなどで対話する場面を設定するか(対話的な学び)、そして学びの深まりを作り出すために、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか(深い学び)、といった計画を立てる

ことが求められる。これは、焦って結果を求めず、長い目で生徒の成長を見守ることでもある。

「長い目で見守る」という言葉を聞いて、「評価はどうすればいいのか」と不安に思う先生方もいらっしゃるだろう。これについては、観点別学習状況の評価の「主体的に学習に取り組む態度」の評価が参考になる。1単位時間ごと、あるいは1単元ごとに評価するのではなく、学期末のタイミングなど、複数単元の学習を通じた生徒の成長を見取ることが推奨されている。また、授業中の挙手の回数や、宿題の提出状況といった、目に見えやすく数値化し

やすい一時的な情報のみに頼るのではなく、行動観察を地道に続けることで、個々の生徒の学びの変容を把握する観察眼を養うことができるだろう。

実はこれは、多くの先生方が当たり前のようにやっていることでもある。例えば、学期末の時点で個々の生徒の顔を思い浮かべると、「この生徒は5だな」「3くらいだろうな」といった感じに、どの程度の成績がつか想像できるのではないだろうか。これは、日ごろから生徒に英語を使って様々な活動をやらせているからこそできることであり、逆に想像できない場合は、そこに授業改善の余地がある。

おわりに

「主体的・対話的で深い学び」の実現は、新しい概念ではなく、「まっとうな授業」を目指して、日々授業改善を進めていくことに他ならない。授業改善とは、生徒の学びと教師の指導の往還である。教師は生徒が学ぶ様子を見て、自らの授業を改善してい

く。そして生徒は教師の指導を通して自らの学びを振り返り、自らの学習を改善していく。このように生徒と教師が鏡のようにお互いを映し出すことで、「主体的・対話的で深い学び」は実現する。



白倉 美里

・東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程英語教育専攻修了
・昭和女子大学人間文化学部助教授などを経て、現在東京学芸大学准教授

「即興力」「主体的に取り組む姿勢」の育成と「語彙力」の定着



習熟度別「即興力」の育成

基礎レベルの指導

新課程が始まり、話すこと【やり取り】の活動をWarm-up Activityとして入れることが多くなつたが、習熟度別少人数授業では即興力、表現力には特に大きな差異があるため、Warm-up ActivityのSmall Talkは、それぞれ会話のゴールを変えて行っている。基礎的なクラスでは、既習文法を使用したモデル会話を活用して、ゆっくりと即興性の伸長を図っている。“What did you do during winter vacation?”など、既習事項の疑問文をあらかじめ提示し、“I went shopping in Harajuku.”など、答え方の基本パターンといふかの関連語彙をヒントとして添え、そこから文を組み立てていく。しばらくの期間このSmall Talkを継続すると、“What do you say when you want to ask your friend about last weekend?”という教師の発話から“What did you do last weekend?”を導き、会話を始めるができるようになる。

次のステップとして、「2文以上で答えること」という条件を付け加え、2文めには主に「感想」、「追加説明」を盛り込ませる。こちらも最初はパターンから入り、徐々に

表現を習得させるようにしている。Small Talkと言しながらも、生徒は日本語での思考を英語へと変換していくため、1文を完成させるまでにはかなり時間がかかり、アクティビティが終了するまでに5分以上かかることが多い。そのため、授業で毎回取り組むことはできないが、繰り返し活動を行っていくうちに、相手の質問に自信をもって2文以上で答える生徒が増えてきた。

今後は、効率を考えながら、Warm-upの活動としてだけでなく、**主体性や即興性をも伸長させることのできるSmall Talk**になるよう改善していきたい。

応用・発展レベルの指導

習熟度別の発展的なクラスでは、即興力（反射力）に焦点を当て、未習の単語や文法にも果敢にチャレンジしながら習得していくような、より自由度の高い会話をを行う。最初は“Ask your friend about winter vacation.”など、会話の最初の質問をある程度想像しやすい指示を行う。会話が安定して続くようになったら、“Today's topic is a movie.”など、会話のきっかけとなるキーワードのみを伝える。そうすることで、“What is your favorite

movie?”や、“Do you often watch movies?”のような質問が出るようになり、ペアによっては即興性の高い自然な会話を目指し活動することができる。なお、やり取りでは、1人2文以上の英文を話すことと、間投詞やあいづち表現を使うことをルールとしている。

発展的なクラスでは、やり取りを1分～1分30秒続けた後に、インタビュー形式で教師が質問し、ペアの相手について発表する活動を行っている。インタビューの内容は、パソコンに打ち込み、電子黒板に投影し、クラス全員で共有しながら、文法や単語の間違い、より適切な表現等について、教師からのフィードバックを与える。授業ではこれを2～3ペア繰り返している。フィードバックを行うことで、正しい知識のインプットと、技能面でのブラッシュアップを図り、改善点等、次回のアクティビティでの目標をもたせることができる。

今後はCan-Doリストを共有するなどして、**生徒に会話力・即興力向上の見通しをもたせられる**ような指導を行っていく必要があると感じている。

パフォーマンステストの活用

パフォーマンステストにおけるループリック評価の活用

新課程へと移行しパフォーマンステストにおいては、ループリック（右図）を用いて評価をする機会が増えた。これにより、評価の透明性が向上したこと、生徒の主体的な取り組みがより多く見られるようになった。ループリックは、「評価規準が

明示されているため、学習（練習）のターゲットに焦点を当てやすい」ことや、「採点票がそのまま教師のフィードバックとなり、通知表の観点別評価の役割も果たしている」ことがメリットである。多くの生徒が自分の到達度を理解することで、自らの課題と向き合い、以後の学習へのモチベーションにつながっていることが見ら

れる。

また、評価の場面やタスクが変わっても、**ループリックの各観点の軸となる部分は変わらない**ため、教師は一貫した指導を行うことが容易であり、生徒にとっても安心して授業や学習に取り組むことができる信頼関係の醸成にもつながっていると感じる。

| 2年生英語科スピーチ(夏休みの思い出)評価票 Class _____ No. _____ Name _____ | | | | | Total Score _____ /20 | | | | | |
|---|--|----|------------------------------------|----|---|----|---|----|---|----|
| 段階 | 評価①「暗唱」 | 評価 | 評価②「発音」 | 評価 | 評価③「内容」 | 評価 | 評価④「声量・態度」 | 評価 | 評価⑤「質問への返答」 | 評価 |
| S (4) | I田も原稿を見ずに、正しい英語でスピーチをしました。 | | 英語特有の発音をよく理解し、語と語のリンクなど、正しく発音しました。 | | これまでに習った文法を用い、聞き手が情景や感想などを想像する上で効果的な英語や文法を使ってスピーチを構成している。 | | 聞き手の目を見て自信をもって堂々と話した。また、聞き手を意識した声量、抑揚をつけてスピーチをしました。 | | 質問の内容を理解し、正しい英語で返答しました。 | |
| A (3) | I回原稿を見てスピーチをしました。(もしくは英語に1か所の細かな間違いがある。) | | 英語特有の発音を理解し、正しく発音しました。 | | これまで使った文法を正しく用い、伝えたい内容が十分に伝わった。 | | 聞き手に伝わる十分な声量で、自信をもってスピーチをしました。 | | 質問の内容を理解し、返答に文法のミスはあったが、十分に伝わった。 | |
| B (2) | I~3回原稿を見てスピーチをしました。(もしくは英語に2~3か所の細かな間違いがある。) | | スピーチの単語を正しく発音し、内容が伝わった。 | | I~3か所の文法的な間違いはあったが、内容が伝わった。 | | 聞き手に伝わる十分な声量でスピーチをしました。 | | 質問の内容を理解し、返答に文法のミスはあったが、単語や語句で返答てきた。 | |
| C (1) | 半分以上の間、原稿を見てスピーチをしました。(もしくは英語に4か所以上の間違いがある。) | | 発音のミスからスピーチの内容が伝わりにくく部分があった。 | | 文法的な間違いが△か所以上あり、内容が伝わりにくかった。 | | 声量や自信のない話し方で、聞き取りにくい部分があった。 | | 質問に関係のないこと返答した。または、文法が大きく間違っていて、伝わりにくかった。 | |
| D (0) | スピーチを全く読むことができなかった。(もしくは、何を伝えたいか全く伝わらなかった。) | | 発音にミスがあり、スピーチの内容が伝わらなかった。 | | 文法的な間違いが多く、全く内容が伝わらなかった。 | | 声量が小さく聞き取ることが困難だった。 | | 返答することができなかっただ。(黙ってしまった。) | |

主体的に取り組む姿勢を養う 協同パフォーマンステスト

NEW CROWN 2年“A Pot of Poison”のパフォーマンステストとしてロールプレイを行った。今回は、ジェスチャーや演技・協調性を、発音や流暢さなどの知識・理解と同等以上に評価した。加えて、主体的に取り組む姿勢について、準備（練習）期間を含めて評価を実施した。演技や協調性を評価項目として盛り込むことで、英語が苦手な生徒も「これなら頑張れる！」という気持ちになり、積極的に音読練習や

身振り手振りの練習に取り組む姿勢が見られた。また、発音や会話の内容理解などは、互いに教え合うことで、学んだことをより正確に理解したり、自分たちなりの解釈を共有したりすることができていた。

ロールプレイを行った後に、授業への取り組み方に変化が生まれたり、定期考査の点数が大幅に伸びたりする生徒もいたことからも、パフォーマンステストの利点を改めて感じることができた。この他にも、新出文法導入時のスキットづくりや、行ってみたい国を紹介する等の活動でも、同様

の効果があったので、今後も主体的に取り組む姿勢を育てることのできる言語活動を積極的に取り入れていきたい。



パフォーマンステストの様子

「語彙力」の定着

新課程では、中学校で指導するべき語彙が1,200語から1,600～1,800語（小学校での学習語彙を含めると、2,200～2,500語）へと大幅に増えた。教科書で扱う語彙が広がったことで、英語が得意な生徒や、学習意欲や吸収力の高い生徒は、多くの新出単語やその派生語、連語などに触れることで語彙を増やし、英語力の絶対値の向上をはかり、これまで以上に学習意欲が向上していることが見受けられる。

一方で、英語が苦手な生徒は、難解になった長文や単語を見るだけでギブアップ、ということしづしばしばあり、英語に対しての苦手意識や抵抗感が強まっている生徒が増えたと感じる。新しい学習指導要領下での指導が始まり、学習意欲と学力の

二極化がより顕著になったというの、新課程1年目の指導を通しての感想である。

単語は、受容語彙と発信語彙を以前よりも強く意識させて練習を行うことで、生徒にも「太字の単語は、読んだり、聞いたりして理解できるだけでなく、話したり、書いたりして使えるようにならなければならない」という考えは根付いてきたように見えるが、「書くこと」については課題がある。というのも、新出単語の音読練習は念入りに行うが、読み方と意味がようやく定着はじめたところで、矢継ぎ早に次課の新出単語が登場するため、書くことまでをきめ細かく指導することができていないと感じているためである。

打開策としては、「書くこと」の言語活動を充実させ、その中で継続的に単語の

習得を行っていく必要があると考える。特に新出文法導入時には、オーセンティックな場面を設定し、より自然な形で新出単語に触れさせ、これまで以上に会話の流れの中で語彙を習得することができる機会を与えることが肝要と考える。例えば、教科書のGETの本文を活用し、習熟度や理解度に応じてペアワークを行わせたり、USE Writeに割く時間を1時間増やし、個人やグループで表現活動に取り組んだりする機会を増やしていくことが考えられる。その際、生徒・教師間のやり取りだけでなく、「書く」→「共有する」→「フィードバック」という流れを定着させ、表現力に加え書く力の向上につなげていきたい。

英語で「やり取り」できる生徒を育てたい! —新課程の授業づくりで目指していること



新課程が始まるにあたって考えたこと

目標の再確認

新学習指導要領が実施され1年が経過した。先生方の授業はどのように変わったであろうか。語彙数の増加に伴い教科書の英文の量が増加し、文法項目の追加により一つの文法指導に充てられる指導時数が減少、新観点による指導・評価へと変化し、そして「話すこと」が【発表】と【やり取り】に分化するなど、これまでの指導が大きく変わったはずである。

指導内容の増加と指導法の変化に伴い、改めて確認しておくべきことが2つある。「何のために英語を学ぶのか」、そして「生徒にどんな資質・能力を身につけさせるべきなのか」。本校の教育では「最上位目標」という言葉を大切にしている。手段の目的化にならないよう学ぶ目的意識をしっかりと、主軸を置いた指導を目指している。それでは英語科の最上位目標とは何か。それを考えるにあたって、まず中学校学習指導要領（平成29年告示）にある目標を再確認した。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考え

などを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」

この目標が我々英語教師の目標すべき最上位目標であり、これをさらに端的に表現すると「英語の使える生徒を育てる」とある。つまり、何をもって「使える」とするかを明確にすることで、新課程の指導の中ですべきことが見えてくる。

「やり取り」を主軸に置いた指導計画

実生活のやり取りにおいても、相手の発言を聞き取り、それに関連した発言をしたり、自分の伝えたい内容を相手に伝えたりする。時には、何かを読みながらその内容について語り合ったり、事前に書き上げたメモを読みながら会話を行ったりすることもあるであろう。つまり、やり取りの力を養うためには、聞くこと、読むこと、書くこと、話すこと【発表】の力を伸ばす必要がある。また、英語においてはこれに加え語彙や表現の習得も関わり、やり取りの力を育てることは結果として、4技能5領域を統合的に指導することと同義であると考える。そのため本校では、「英語が使える」生徒を育てる最上位目標を達成するための方法として、話すこと【やり取り】

を主軸にした指導を行っている。

英語でやり取りできる生徒を育てることは、これまでの英語教育の課題とも言われてきた。英語でやり取りを行うためには、以下の点が大切なことを生徒たちに伝え、指導を続けている。

- ▶相手の考え方や思い、伝えたい内容を聞いたり読んだりして情報を正しく得る
- ▶自分の考え方や思い、伝えたい内容を他者の理解、視点に立って表現する
- ▶互いの理解を図りながら会話を進める
- ▶主体的に思考し、即興で適切な表現でやり取りする

本校の授業は週4時間のうち、教科書を扱った授業を週3時間、ALTおよび教師のTTによる表現活動の授業を週1時間で進めている。単元末または学期末までに身につける力を見越し、やり取りを中心としたパフォーマンステストを設定し、表現の授業では、それに向けた思考力・判断力・表現力の育成を行う。また教科書を扱う授業においても、パフォーマンステストで活用する英語力、資質・能力の育成を軸に、新出文法の定着、本文の理解や活用を行うことで、学習の目的を明確にした授業展開を心掛けている。

実際に授業で行っていること

「やり取り」の指導の流れと留意点

やり取りを円滑に行うためには、生徒がどのように会話を行うべきかを理解している必要がある。やり取りする姿、つまりは生徒が目指すべきゴール、そしてその目標を達成するための道筋・方法がわからなければ自分ではそこにたどり着けない。そのため、この道筋・方法を必要に応じて指

導することが大変重要なことである。

やり取りの活動を授業で行う際は、右の指導の流れを基本としている。（これは一単位授業で活動を行う場合の例だが、帯活動や読解後などの表現活動で行う場合も②～④を繰り返す。）

なお、活動の初期段階では、次のような課題がみられることが多い。

（指導の流れ）

- ①目標や評価基準を確認する
- ②タブレットPCでやり取りを録画する
- ③録画したものを見て、評価基準をもとに改善点を話し合う
- ④改善点をふまえて、再度やり取りを行う
- ⑤やり取りした会話を書き出し、英文の正確さや内容の適切さを見直す

- ▶会話が指定の時間の半分にも満たない
- ▶やり取りではなくインタビューになっている
- ▶互いの英語力に差があり、会話が成り立たない
- ▶即興で英語を表現することができない
これらの課題がみられた場合、そのクラス、生徒に何が必要かを見極めながら、適宜授業の中で取り上げ、必要な要素を意識させて練習させている。

評価基準の項目

やり取りの活動の評価基準の項目は、大きく9つの要素に分けられる。これらの要素は、生徒たちの活動時の様子や日常の会話から得られたものもある。休み時間に、生徒の何気ない会話に耳を傾けてほしい。普段彼らがどのようなやり取りを行ってい

るのかを分析することで、彼らができること、話し方の特徴、会話をさらに充実させるために必要なことがおのずと見えてくる。

□即興性、発話のスピード

間違いを恐れず、自分の考えや思いを伝えようとしている。

□会話の継続

話題を転換するなどして、会話を継続させようとしている。

□傾聴の姿勢

一方的に話すのではなく、相手の答えや反応に応じて会話しようとしている。

□言い換え

言えないことがあったときに既習の表現を用いて言い換えることができる。また、相手に伝わっていないときに、より易し

い表現を用いて伝えることができる。

□リアクション、あいづち表現

必要に応じて相手の発言に反応したり、感想を述べたりすることができる。

□関連した質問

会話を深めるために、相手の発言や反応を受けた質問をすることができる。

□語順の理解と活用

肯定・否定・疑問文の基本的な語順に従って、文を作ることができる。

□語彙力

言いたいことを伝える、相手の英語を理解できるだけの十分な語彙力がある。

□内容に即した発音

内容に応じて、リズムやイントネーションなどを適切に発音できる。

Point 1 あいづち表現を積極的に使わせる！

日常生活の会話の中でも、中学生はよくリアクションをとっていて、非常にたくさんのあいづちを使っている。しかし、英語のやり取りとなるとその力を十分に発揮できず、いわばインタビューのようなやり取りになってしまふ。そこで、会話で使われるリアクション、あいづち表現をまとめたものを提示し、会話で積極的に使うことを指導する。それだけで会話が生き生きしたものになり、彼らの言葉に表情が生まれるようになる。

Point 3 会話を深めるための質問をさせる！

通常、会話において聞き手は相手の発言を受け、関連する質問をしたり、意見を言ったり、感想を述べたりしている。授業の中でそのことに気づかせながら、相手の発話内容をさらに深く知るための質問をする練習を行う。このことを意識させることで会話の深まりが生まれるだけでなく、相手の話を傾聴する姿勢が身につく。

Point 4 パラフレーズの技術を身につけさせる！

「皆さんの日本語力を英語に置き換えると英検2級以上です。」これは表現活動の時に必ず生徒に伝えることである。話す活動でも書く活動でも、生徒は自分の言いたいことを日本語で考え、英語に変換しようとする。しかし、その日本語は英語にするには難しく複雑で、仮にそれが何かの手段で英語にできたところで、変換に時間がかかり即興性がなくなってしまう。直訳だと相手に意味が伝わらないことが多いので、意訳の意識を育てていく必要がある。例えば「かなづち」は“swim like a brick”だが“can't swim”的方が表現しやすいし、伝わりやすい。パラフレーズの技術を身につけることは既習事項の定着につながるだけでなく、聞き手を意識して表現する姿勢が身につく。

Point 2 誤りを恐れず、発話のスピードを意識させる！

やり取りは互いの発話のスピードが重要であるが、即興で話すことは多くの生徒にとって大きな壁となっている。特に筆記テストに向け正確性を磨く生徒にとっては、間違たくない、自信がないなど、即興的に英語を生成することに課題がある。しかし、間違ないと自分のエラーの癖がわからない。言語習得過程ではネイティブもエラーをしながら即興性と正確性を磨くことを伝えつつ、まずエラーは気にしないこと、間違えても伝えることの大切さを指導している。

今後の課題

やり取りの活動を中心に据えた指導を行う場合、たとえそれが他技能・領域に関連があっても、これまで行ってきた活動に充てる時間を圧縮する必要がある。そのため、学習ソフトを活用したり、協働学習を積極的に取り入れたりするなどの工夫を行ってきた。今後はもっと、タブレット

や学習者用デジタル教科書を活用していく。生徒の発音チェックには音声認識やオンラインの翻訳機能を活用したり、英作文のチェックにはグラマーチェックの機能を活用したり、協働編集ソフトを使って生徒相互に英文をチェックさせたりすることもできる。

これからICTがますます発展し、数年後には生徒の発話を聞き取り、改善する機能が当たり前になる日が来るはずである。そのような技術がないか日々アンテナを張り、授業に活用することで、「英語の使える生徒」を育てるための授業を展開することが我々英語教師には求められていると思う。

小中接続の視点から見る 新たな授業づくりのTips

坂本 南美
(同志社大学)



英語と出会いなおす授業づくり

本稿では、授業研修や研究会、先生がたとの談話を通して見えてきた課題を踏まえつつ、ともに取り組んできた新課程の中学校英語の授業づくりについて小中接続の観点からお伝えしていきたい。

昨年4月は、新課程のもと、小学校での学びを引き継ぎながら、新入生があらためて違う角度から「英語と出会いなおす」授業づくりを意識した時期となった。小学校で、たくさんのピクチャーカードや映像による場面設定の中で、文字にも触れながら、音声を中心に英語に慣れ親しむ経験を経て新入生は入学してきた。

「慣れ親しむ」というのは、定着や習得を想定するよりも、むしろ単元で導入された新出表現を理解して、練習したり、それをもとに言語活動を行ったりする状態を指す（文部科学省、2017）。そのように慣れ親しんだ英語について、中学校ではどのような授業がスタートするのか。

1年生の教科書は、登場人物の自己紹介から始まることが多い。これまで、名前やニックネームの紹介にとどまっていたが、新しい教科書では、1つのページに

小学校で扱われた表現が複数入っていたり、多様な語彙も組み込まれていたりして、話題も豊富に提示されている。1年生の春にこの情報量をどのように扱っていくかは、一つの大きな課題である。

新課程へ切り替わって、教師自身も戸惑うだろうが、1年生の授業では、これまでの導入期と同じく、生徒を英語の世界へ誘いながら、英語を知るワクワク感を引き出す授業づくりを進めていきたい。

育みたい英語力とコミュニケーション力は両輪である。小中接続期は、言語活動を通してコミュニケーション力を育成しながら、あらためて英語の構造を認識する授業の始まりとなる。

今までと違う点は、自己紹介のトピックについて小学校で音声を中心に覚えたり、書き写したりしていることである。つまり、生徒はこのトピックの語彙や表現については、音声を中心にある程度の認識ができる。それはぼんやりとしたものかもしれないが、ここで扱われるターゲット文法は緩急をつけながら確認しつつ、この時期は文字への意識を高める時期だと捉えたい。

なんとなく覚えていたスペルをはっきり認識したり、似たような表現をより正確に区別したりし始める時期。まさに、あらためて英語と出会いなおすこの時期は、活動の種類を変えながら、正確に、そして多様に学んでいく意義と、それを使ってやり取りする楽しさに気づかせたい。

コミュニケーションの側面から見ると、教科書に見られる一般的な自己紹介も、話す相手によって内容を変えていくことができる。相手が担任の先生であれば、最後は“*I want to study hard.*”となるかもしれないし、ALTなら、日本の紹介も入れて“*Please try a tea ceremony sometime.*”と添えるかもしれない。小学校で音声を中心に学んだ内容をあらためて確認し、場面設定の広がりを経験させていこう。「知識・技能」の側面に「〇〇先生に合わせた自己紹介をする」という目的が加わることで、「思考・判断・表現」の幅も広がっていく。

「書き写す力」から「書く力」へ

2つめの課題として挙げられるのは、5領域のうち「書くこと」に関する内容である。「書くこと」については、「読むこと」とともに小学校5、6年生で慣れ親しむことからスタートした。その学びを引き継ぎつつ、中学校での「出会いなおしき」では、その「定着」を意識させていくことが重要になる。小学校でなぞり書きをしたり、書き写したりと丁寧に書き写す経験を重ねた新入生が、いよいよ自分の力で書き始める段

階へと進んでいく。

「書く楽しさ」はどこにあるのか。「書くことの醍醐味」とは何か。ぼんやりと覚えていた英語を定着させていくために、「文字の認識」を踏まえて「書く」という2つのステップから見ていく。

(1) 音と文字の認識を高める

まず、「書くこと」につながる音と文字の連動に意識を向ける場面づくりである。うろ覚えだからこそ、スペルが正確かどうか

を意識できる活動が必要となる。授業で、これまで行ってきた活動の回数や種類を増やしてみるのも一つである。例えば、教科書の単語を使って、文字を並べ替えスペルを完成させるゲームを蒂活動に置くことができる。また、単語のカードを並べ替え文を完成させるゲームにすることもできる。ここで、ALTにも協力してもらい、スペルが違うと正確には伝わらない経験をすることも大切である。多くの生徒にスペルの定着

や文構造の理解を促していくことは根気が必要であるが、コミュニケーションの場面では大切な要素だということをクラス全体で共有したい。

(2) 「書くこと」へのアプローチ

書くことの楽しさや醍醐味を考えるとき、読み手の存在は一つの鍵となる。それを踏まえながら、「書くこと」自体へのアプローチを2つの側面から捉えていく。

1つめは、「しっかり書くぞ」という活動。まとまった英文を書くことを意識した活動である。教科書の内容を生かして、「何のために」「誰に向けて」書くかという教師のトピック設定も重要になる。「しっかり書く

くぞ」という活動では、正確さや分量にも意識を向けることになる。学習段階によって、ペアやグループでの協同作業としても位置づけることができる。また、生徒の書いた英文に対しては、ALTが英語について、英語教師が内容についてフィードバックするように分担しておくのも一つである。

2つめは、「書くこと」への意識づけを自然に高める気軽な機会の設定である。ここでは、タブレットも活用できる。生徒は1、2文の短い英文のチャットをタブレットからアップする。教師はスクリーンを使って、生徒のチャットという生きた教材を使って、クラス全体へフィードバックすることができ

る。「ここ、惜しいね!」「いいところまで書けてる。」「さあ、この単語をどう変えたらいいかな。」など、クラス全体でのやり取りの中で、間違えやすい文法を取り上げたり、「さすが! いいアイデアを持ってるね。」と内容へのコメントを共有したりすることができる。気軽な雰囲気の中でチャレンジできるようハードルを低めに設定し、「まずは書いてみる」というところからスタートすることで、間違えてもいい空間をスクリーン上に創っていくのである。この活動が定着していけば、チャットが「間違えてもいい場所」「間違いから正確さを学びなおす場所」として生きてくるといえる。

個々の生徒の状況を見取る

複数の小学校から生徒が入学てくる中学校では、彼らの学びの背景も学校によって、また生徒によって異なることがある。個々の生徒の現状を見取ることは授業づくりの一つの課題である。

新しい教科書は、教師の視点と生徒の視点とでは、見え方が少し違ってくる。教師から見る新しい教科書は、旧課程の教科書との比較が主になるが、特に1年生の生徒にとっては、小学校の教科書との比較から、その違いがクローズアップされる。その視点で教科書を見ると、彼らに印象的に映るのは次の3点となる。

- 文字による情報量がぐんと増えたこと
- パートごとに新しい言語材料の説明が設けられていること

● コミュニケーションの場面に加えて、書く活動とその量が増えていること

この3点を踏まえたうえでの生徒の印象は「面白そう!」「大変そうだな。」「早くやってみたい!」「できるかな…」と千差万別である。小学校での個々の学習背景のもと、生徒はいろいろな印象を持って授業に臨んでいくことが想像できる。

教師側の留意点としては、生徒の現状を踏まえながら、これら3点への抵抗感を下げつつ、スムーズにスタートを切る授業づくりを目指すことだと言える。すでに見聞きした単語や表現でも、あらためて多く

の情報とともに目に映ると、ぐっと構えてしまう生徒、知っているからと軽く感じる生徒、興味津々に見ている生徒、積極的に活動する生徒など様々である。

そこで、増えた情報量はいくつかの活動に振り分けつつ、これまで行ってきた帯活動などを用いて繰り返し扱いたい。50分の授業で、教科書の活動や、教科書の内容を絡めた活動を扱いながら、①英語が苦手な生徒も含めて、全員が平等に参加できる活動を3つ、②英語が好きでよくできる生徒の学習欲求を満たす活動を2つ、③「はっ!」とする活動を2つ、といった活動デザインはどうだろうか。もちろん、時間配分やタイミングは教師によって自由である。

①は、教科書の内容をはじめこんだビンゴやクイズ、単語を使ったタスクや活動などが含まれる。個人だけでなくペアやグループでも展開することができ、帯活動に置くと、活動の流れがわかるので全員が参加しやすくなる。②は、前述の「しっかり書くぞ」という活動も含めて、英語の力試しとなる活動。教科書に出てくる表現も含め、関連した情報や+αの表現、ALTとの導入に巻き込むやり取りなど、今の学習段階にワンステッププラスする内容を指している。そして③は、教科書や英語に関する気づきを促す活動。教科書のトピック

をもとに言語としての英語の面白さや文化的な気づきを引き出す活動は、クラスで共有するとさらに楽しい。これまでの言語活動や帯活動にこれらの内容をバランスよく据えながら、50分を通して、教科書を軸とした「つながり」を持たせることができる。

帯活動や言語活動を生かすことで、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力」を育むことができる。また、「学びに向かう力」の育成も教師の導きのもと進めいくことができる。

おわりに

英語の授業は、他の教科の授業とは異なる点がいくつかある。その点について、ある先生との話を紹介する。「母語で行われる日常の延長にある他教科の授業に対して、英語の授業だけは非日常の世界で授業が行われる。英語を使ったやり取り、英語によるコミュニケーション。普段の日常とは違うモードで、日本語ではない世界に生徒を誘う科目。」そんな英語の授業で、これまでの先生がたの経験を礎に、英語を知るワクワク感を引き出す授業づくりを目指していく。

【参考文献】

文部科学省(2017)『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』

言語活動のキーポイント

— ゴール・ルール・ツール・ロール —

今井 裕之 Imai Hiroyuki (関西大学)

① よい言語活動の条件

よい言語活動をデザインするポイントは何でしょうか。答えは複数ありますが、まず学習指導要領には、「言語活動 (=思考・判断・表現)」は、目的や場面・状況の設定が重要な条件だと述べられています。この学習指導要領になってから「活動の目的・場面・状況は何?」「これは思考・判断・表現それとも知識・技能?」「そもそもコミュニケーションの『目的』は常に必要か、コミュニケーションすること自体が目的ではないのか?」などの疑問はわきませんか。こういう疑問は、うやむやにすると進歩がない、突き詰めようすると行きづまる類いの問い合わせなので、教科書の言語活動を例に一度整理してみましょう。

② 教科書の事例から

NEW CROWNの言語活動 (USE, Take Action!) には、目的・場面・状況 (Goal, Situation & Condition) が設定されています。たとえば3年Take Action! Talk 4 「道順を教えていただけますか」を例に取ると、場面・状況は「神戸空港で(場面) / 困った様子の海外からの旅行者が、陸に話しかけました (状況)」です。そして言語活動の「目的」は、旅行者役には「道順をたずねる」、陸役には「交通経路を説明する」のように、会話する両者各々に異なる「ことばの働き」を目的として設定しています。

同じく3年Lesson 6 USE Writeでは、「世界中の中学生が参加する『Wish Upon a Star Poetry Contest』に応募する」ことを目的・場面・状況に設定し、ものや動物などに成り代わって気持ちや願い事を英詩にする言語活動を設定しています。いずれの場合も、生徒たちは話す・書く内容を、目的・場面・状況に合わせて選択して表現します。Talkの例では道案内が目的なので、陸役が王子動物園（神戸市内の観光名所）の魅力を話したら、目的・場面・状況に合っておらず、思考・判断・表現の観点からはよくないことになります。

③ 「目的・場面・状況」以外にも

よい言語活動のポイントは、目的・場面・状況だけではありません。Lesson 6 USE Writeをもう一度見てください。

「みんなのひとりごと」は、主体的に学習に取り組む態度の育成に重要な「自己調整」つまり、「①目標設定と学習計画を立てる、②学習を工夫する、③学習を振り返る」ことを支援しています。

また、“Follow the Steps”では「アイデアマップ」を使って、言語活動の見通しを立て、書く内容を取捨選択するサポートをします。続く“Work in Class”では、「対話的な学び」を促すように、クラスやグループで協働して英詩を書く「ジョイント・コンストラクション」を設けています。

④ 言語活動過程を支える4要素

このように、教科書の言語活動には、学習効果を高める支援策が仕組まれています。それらを4つのキーワードでまとめてしましょう。

1) ゴール

目的・場面・状況を設定することで、生徒たちと明確な目標を共有することを助けます。

2) ルール

言語活動の手順や、個人、グループ、クラス全体の活動形態を指定し、生徒たちが「今何をしたらしいのかわからない」と戸惑う時間を作らないようにルールを設定しています。

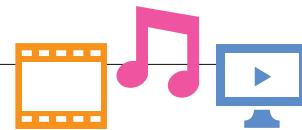
3) ツール

アイデアマップやロールプレイカードなどの、思考・判断・表現の支援ツールを使って、「できそうでまだできない」現在成長中の生徒たちの背伸びを助けます。

4) ロール

「道をたずねる旅行者」、「案内する人」など、生徒たちが言語活動で演じる役や、互いにアドバイスし相手の学習に貢献するセンター役など、ゴール達成のための役割が示されています。

「ゴール」「ルール」「ツール」「ロール」が揃った言語活動を通して、生徒たちは協働しながら背伸び (performing a head taller) して成長していきます。



Mark Schwarz (Fuchu Higashi High School / Lingua Language Studio)

How do people learn the vocabulary of their first language? They acquire a lot of words before they learn to read, so it can't be from dictionaries. Maybe some is learned from hearing more advanced speakers saying things like, "Oh, look at that dog!" then observing the object at being talked about and adding that word to their memory banks.

But I don't think it works that way in most cases. We grow up surrounded by words, and most words have a range of meanings and nuances which we could not learn from a single exposure. Instead, each time we hear a word, it adds to our in-depth understanding. Take a look in a good dictionary for the meaning of that simple noun I used as an example in the first paragraph, "dog". It has many definitions and idiomatic usages.

However, when we come to study a second language, we want to understand as much as possible, as quickly as possible. Our first instinct is to look up new words in a bilingual dictionary. This is a useful starting point, but "dog=犬" is certainly not a complete definition.

In addition, many students believe that only young

children learn language by absorption. That's just not true. We continue to build up our native vocabulary throughout our lives, although it is at a slower rate than in our youth, and only rarely need to look up new words and phrases.

We are not exposed nearly as much to a second language as to our first, however. Because of this, students need to take a more active approach to gain deeper familiarity. I have found that extensive reading and watching videos are very useful. Don't think of such activities as studying; do them for entertainment or out of interest, as you would if doing the same thing in your first language. Don't look up unknown words unless you really have to, but make a note of ones you think are particularly interesting or useful, and especially think about words that you've seen before that are being used in unfamiliar ways.

Words are a bit like friends. You may feel uncomfortable interacting with them at first, but you gradually get to know them after many encounters. With a little dogged effort you'll find you CAN teach an old dog new tricks.



リクツで納得! 学校英文法の「文法」 亘理 陽一 (中京大学)



In what sense can you count on it?

Ed Sheeranの"First Times"という曲がある。自身のこれまでの歩みを振り返りながら、「初めてのキス」や「初めてしたケンカ」、「初めて君が泣いた歌」等々、パートナーと共有した「初めて」がいくつも並べられていく。だから、複数形を用いた曲名になっているわけだ。一方、"Time will tell."（時間が経てばわかる）などと言った時のtimeは、特定の具体的な出来事を指しているわけではなく、数えられるものとは捉えられない。

われわれはよく可算名詞・不可算名詞という言い方をし、辞書でも実際C(countable)とU(uncountable)という表記が用いられているが、「数えられる／数えられない」とは一体どういう意味においてなのだろうか。そして、timeのように、ある名詞が可算として用いられたり不可算として用いられたりすることをどう考えたらいいのだろうか。

名詞が数えられる時、それは「ひとたまりの全体として、それ以上分割できないもの」として概念化されている(Huddleston & Pullum (Eds.), 2002, pp. 335-337)。分割できないと言っても、例えばan appleは物理的に切って分けられるのだが、それが意味するのはあくまで1個丸ごとのリンゴであって、皮を剥いて食べや

すぐカットされた状態は元の形ではなく、sliced appleとかsome pieces of appleと不可算で表現されることになる。一方、名詞が数えられないのは、それ自体にそうしたまとまりとしての区切りや境界がない場合である。例えばwaterはグラス一杯でも一滴でも同じ水なので、どういう「器」で捉えているのかをa glass of waterやa drop of waterなどと明示する必要がある。

waterやmilkのように均質な物質で構成される名詞は比較的わかりやすいが、学習者が特に混乱するのはfurnitureやequipmentのように異なるもので構成される名詞だろう。しかしこれも、大豪邸に住む大家族のものであれ、一人暮らしのミニマリストの必要最低限のものであれ、家具一式は家具一式という意味で、水と同じように考えることができる。イスやテーブルの一つひとつは数えられても、どういうものをどれだけ備えているのが家具や設備の「ひとたまり」と言えるかは「家具」という言葉それ自体では決まらないから「数えられない」のだ。

そう言っているそばから、お店で "Two waters, please." という表現に出会ったりする。われわれは名詞を可算と不可算のどちらかに分類したがるが、実際のところ、多くの名詞がどちらの用法でも用いられるから厄介だ。ただし、そ

れぞの用法を覚えなければならないと言いたいのではない。むしろその意味は、上述の概念化の理屈に照らして主たる用法からかなりの程度、予測可能である。つまり、不可算用法を基本とするwaterが可算で用いられているということは、一人分の「ひとたまりの全体」として、そのお店のグラスや、ペットボトルに入った商品を指すとわかる。逆に、数えられる動物の名前が不可算で用いられれば、リンゴの一切のよう、様々なポーションで食べられるその肉を表すのだとわかる。

これに納得できれば、不可算用法としての抽象概念が、可算用法で一つひとつの出来事や結果を表すこともイメージしやすくなる。「時間が経てばわかる」はずのその「時間」の長さがどのくらいかわかれば苦労はないので、"Times will tell." と言うと、どういう場合や時期のまとまりなのかと戸惑ってしまう。しかし「初めてすること」は、理由(reasons)や心配事(worries)を数え上げるように、その中身によらず区切って数えられる。相手と共有する出来事をそう捉えて、"I can't wait to make a million more first times." (さらに100万回の「初めて」が待ちきれない)と歌えるのがEdのカッコ良いところで、可算は時にロマンチックの源ともなるのだ。



Question

NEW CROWNを使っていますが、なかなかGETとUSEをスムーズにつなぐことができません。どんな工夫をするとよいでしょうか。



酒井 英樹 (信州大学)

Answer

GETの本文や活動は、ポイント文の導入や文法の練習問題として使うだけでなく、要点や概要を捉えたり、やり取りを継続するためのポイントを示したりして、「思考、判断、表現」の練習として活用しましょう。



NEW CROWNのGETの目的は「知識及び技能」の習熟です。一方、USEの目的は「思考力、判断力、表現力等」の育成で、読むことでは英文量が多くなり、話すこと・書くことでは目的や場面、状況に応じることが求められます。両者のギャップを埋めるために、GETの本文や活動に基づいて、USEに向かった橋渡しの指導を行うとよいでしょう。

橋渡しの指導として、第1に、既習の文法事項の復習や、新出の文法事項と既習の文法事項の使い分けを意識した練習を行うとよいでしょう。例えば、GETの本文やListenでは、内容理解を問う英問英答を通して、既習文法を理解し使用できるかを確認し、必要に応じて指導します。また、GETのTalkでは、新出の文法事項だけでなくさまざまな文法事項を使うことを求め、新出の文法事項と他の文法事項を正しく使い分けられるかを確認します。

第2に、GETの本文や活動を用いて「思考力、判断力、表現力等」を少しづつ育成することも大切です。聞くことや読むことにおける「思考、判断、表現」とは、目的・場面・状況等に応じて、必要な情報を理解したり、要点（話し手や書き手の最も伝えたい点）や概要（話の展開や構成、トピックなど）

を捉えたりすることです。特に、要点や概要の把握のためには、得られた情報と情報の関係を捉える必要があります。USE Readは英文が長く、情報と情報の関係が複雑であるため、要点や概要の把握は難しくなります。そこで、GETの本文やListenを活用して、情報と情報の関係を把握する練習をするとよいでしょう。要点を尋ねる質問（What does he/she want to say the most?など）をしたり、概要を捉るために情報と情報の関係を整理したりします。

2年生のLesson 2を例にして説明します。Part 1では、HanaがI want to work at a farm.と言った後に、MarkがWhy?と尋ねているので、その後でHanaは農場で働きたい理由を述べていることがわかります。そこで、①My grandparents have a restaurant. ②They use organic fruits and vegetables. ③My plan is to learn about farming.のいずれがその理由なのかを生徒に尋ねます。ここでは、I want to work at a farm because (). の空欄に①、②、③のどれが入るか検討することで、①と②では農業に関心を持った背景が、③では農場で働きたい直接的な理由が語られていることが理解できるでしょう。

USE Speakなど、話すこと【やり取り】における「思考、判断、表現」の一例として、目的・場面・状況等に応じて、相手の発話の内容に応じて適切に質問したり、応答したり、感想などを述べたりして、やり取りを継続することが挙げられます。これは、GETの本文や活動を利用して、質問や応答の仕方、感想の伝え方などを学んだり、練習したりするとよいでしょう。例えば、2年生のLesson 2 Part 1の本文では、MarkがHanaの回答が意外であることを示したり（A farm?）、理由を尋ねたり（Why?）、感想を述べたり（I see. That's a good plan.）しています。そこで、まず(a) 相手が意外なことを言った場合は、意外であることを示したり（A farm? のように繰り返したり、Really? と聞いたりする）、理由を尋ねたりし、(b) 相手の話す内容が意外ではなかった場合は、興味を示したり（That's a good plan. / Interesting.）、応答したり（I see.）といった会話の展開を確認します。そして、Listenで用いられている表現を確認してからTalkの活動に移っていくとよいでしょう。その際、やり取りの継続が必要となるよう、「ペアでやり取りを2分間継続しよう」というようなねらいを共有することも大切です。

NEW CROWN デジタル教科書 アップデートのお知らせ

令和3年度版NEW CROWNの各種デジタルコンテンツをご利用中のみなさまへ、

令和4年度版へのアップデートをご案内いたします。

引き続き、ぜひご活用ください。

■アップデートの対象

以下の環境でご利用中のデジタルコンテンツが対象となります。

◎インストール版(Windows/iPad)

- ・NEW CROWN 指導者用デジタル教科書(教材) 1年／2年／3年
- ・NEW CROWN 指導者用デジタル教科書(教材) Lite 1年／2年／3年
- ・NEW CROWN 学習者用デジタル教科書+収録音声付き 1年／2年／3年
- ・NEW CROWN 学習者用デジタル教科書・教材 All-in-One

※ Web ブラウザ (Chrome、Edge、Safari) ご利用の場合、更新処理の必要はございません。

※ NEW CROWN 学習者用デジタル教科書・教材 All-in-One は年間ライセンスです。ライセンスを更新された場合のみアップデートが必要となります（取得済のコンテンツに限る）。

※ NEW CROWN 学習者用デジタル教科書・教材 All-in-One には、学習者用デジタル教科書+収録音声付き（各学年）にくわえ、スマートフォンアプリが付属します。アップデートの対象は、学習者用デジタル教科書+収録音声付き（各学年）のみとなります。

■アップデート内容

- ・2022年4月から使用される教科書に合わせた紙面及びコンテンツの更新
- ・軽微な不具合の修正

■アップデート方法

◎Windows版/iPad版

①ことまなビューア起動時に更新通知のダイアログが表示されます。

②ユーザー選択画面にて「商品一覧」を選択し、対象教材の「更新」ボタンを押してください。

※ アップデートにはインターネットへの接続が必要です。

※ビューアの使い方の詳細は、ビューアのヘルプボタンから「使い方」をご参照ください。

訂正に関するお知らせ

►NEW CROWNについて

三省堂 教科書・教材サイト

三省堂 中学英語 訂正



令和3年度版 中学校英語教科書『NEW CROWN』に訂正がございます。訂正につきましては、すべて文部科学省の承認のもと、令和4年度用の教科書では修正して供給いたします。訂正箇所につきましては、弊社ウェブサイトに掲載しております。

先生方や生徒のみなさまにご迷惑をおかけいたしますことを深くお詫びいたします。ご指導の際にはご留意くださいますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

►指導書・指導用教材について

ことまな学校サポートサイト

ことまな学校サポートサイト



指導書・指導用教材についての訂正は、指導書・デジタル教科書（教材）等をご採用いただいている学校ごとの専用サイト「ことまな学校サポートサイト」にてご案内しておりますので、あわせてご確認ください。



ジュニアクラウン 中学 英和辞典 和英辞典

第14版

第12版

オール
カラー

田島伸悟・三省堂編修所[編]
 B6判 オールカラー 832ページ
 定価1,980円(本体1,800円+税10%)



田島伸悟・三省堂編修所[編]
 B6判 オールカラー 640ページ
 定価1,980円(本体1,800円+税10%)

徹底的な
教科書分析で
小学校・中学校の
英語学習を接続!!
豊富な用例で
「話すこと」「書くこと」の
表現活動を
サポート!!

2022年4月 辞書のWebアプリが使える特典付き!
サービス提供開始予定

『ジュニアクラウン 中学英和辞典』『同 中学和英辞典』をご採用いただくと、
 付属のサービスとして、タブレットやスマートフォンなどでWebアプリをご利用いただけます。

**NEW CROWN 登場人物の
LINEスタンプ好評販売中!**



動く! NEW CROWN 英会話スタンプ



LINE STOREで NEW CROWN スタンプ

中学生のスマートフォンやSNS等の利用を推奨するものではありません。

©Minoboshi Taro

三省堂 教科書・教材サイト

<https://tb.sanseido.co.jp/>

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 TEL 03(3230)9411(編集)・9412(営業)